

社会保障年金財政再建の 最近の動き

(アメリカ)

社会保障年金制度の財政危機が取沙汰されて久しいが、いよいよ財政措置の強力なテコ入れをめぐって連邦議会でも上下両院の改革案が提出されている。今回は最近の社会保障年金制度の危機の状況と改革案等について紹介する。

1977年だけでも連邦政府は社会保障年金制度に基づき徴収する社会保障税と信託基金の利子収入より55億ドル多い額を給付費のために拠出している。この調子でいけば、今後10年で財政赤字は年約460億ドルになるかもしれない。

連邦議会の改革案には、将来必要とする資金のために財務省の一般歳入からの拠出を、という提案もある。また現行の65歳からの完全年金受給資格を68歳もしくは69歳にするという提案もある。諸提案の共通の目的は、社会保障年金制度の運営仕組みをできるだけ現行のままに保持して、しかも急激な社会保障税の引上げを行わないとするものである。

<人口変動のもたらす危機>

社会保障税は、すでに多くの労働者にとって年間ほぼ1,000ドルで、しばしば所得税よりも多い状況である。現在議会で提出されている改革案に基づけば、社会保障税の最高額は今後10年で2倍または3倍になるかもしれない。今日、約3,400万人が年金および扶養給付または遺族給付を得ており、受給者数は合衆国人口の6人につき1人の割合となっている。65歳の退職労働者に対する最高給付月額は、1971年時には約200ドルであったのが1977年時には約400ドル

に倍増した。連邦議会が現在課そうとしている追加の社会保障税は、今後7年間のみで約1,000億ドルになろう。労働者やその使用者は、増大する負担に不満を表明している。

しかし年金制度の年間欠損は、これまで信託基金を使いつくし、現在社会保障税収から給付費を拠出しているが、経済不況と失業の増大で、社会保障税収よりも給付費の方が上回っている状態である。

長期的展望としては、現状のままでは20~30年のうちに社会保障年金制度は広範に破綻することが見込まれる。1940年代の戦後のベビー・ブーム時に生れたグループが退職年齢に達する時、社会保障年金制度は、ドラスチックな措置が直ちに講じられないかぎり、全ての給付を支給できないであろう、と保険数理士は語っている。皮肉にも確実な収入不足の1要因は、これらの年齢グループによる1960年代から低下している出生率による社会変革である。

生活様式の変革は、より多くの者が1人暮らしをすること、およびより多くの未婚カップル(同棲者)が出ることを意味している。環境への関心の増大と人口増大の警告は、若い夫婦者に少ない子供または子供なし家庭を助長するようになっている。経口避妊薬の開発も出生率の低下に拍車をかけた。戦後のベビー・ブームは1957年にピークであり、女子1人につき3.8人の子供という出生率であったが、1976年までに出生率は1.8に落ち込み、単純再生産よりも下回った。

これら全ての結果は、退職人口との比較で労働人口の減少という展望をもたらした。なお医学の進歩は、老人の寿命を延ばしたので、より長期にわたる退職年金の支給期間をもつようになった。

別に私的年金制度の普及は、連邦議会およびホワイト・ハウスが定年延長の圧力をかけているにもかかわらず、ますます早期退職を助長している。

<危機要因となった政策>

しかしながら、年金制度の病根は完全に予期しない人口変動の結果によるも

のではない。

例えば、1972年に連邦議会は社会保障年金給付額を消費者物価の上昇に自動的に調整して引上げることを票決した。このインフレ調整のために、受給者は最終労働年に拠出した額よりも多い年金額を得ることができるというのである。かくして年金額は拠出額により近い額であるべきとする原則から何回も逸脱してしまった。

また1950年に連邦議会は、社会福祉負担の若干を社会保障プログラムに移動させる目的で、最低給付額を倍増した。後年の最低支給額の引上げと合せて当該措置は、より広範に経費のかさむ制度にしてしまった。

私的年金制度でカバーされる職業からの早期退職者の多くの者は、現在社会保障年金制度でカバーされる職業に転職しており、彼らは第2回目の年金を得ようとしている。

<発足当初からの財政危機>

1940年に、社会保障年金制度が給付を初めて支給した時に、多くの者が社会保障税拠出後のわずか36月後に支給をうけている。例えば、1940年1月1日に受給者となったある法律事務職者は、それまで給料差引の社会保障税を全部で22.54ドル拠出した。そして1975年1月25日の死亡時には退職年金額21,000ドルであった。

1950年に連邦議会在が1,000万人の自営業者およびその他に年金制度の適用を拡大した時、多くの者達は、18月の短期間社会保障税を拠出した後に受給者となる年齢の者達であった。65歳間近の自営業者は、1951年1月1日から1952年中頃まで全部で121.50ドルを拠出し、月額80ドルの年金受給者となったのである。

<改革案の概要>

現在連邦議会の上下両院で審議中の改革案について、上院案と下院案の概要

を、以下の項目別に対照させて紹介する：

下院案

(社会保障税)

現行よりもより急速に上げられる。被用者および使用者の最高額は、1977年の965ドルから1982年には2,115ドルに、そして1987年には3,025ドルにと、現行の課税計画よりも50%高いレベルで上げられる。自営業者に対するそれも1987年までには約3倍になる。

(所得制限)

65歳で退職した者に対しては、給付額を失わないですむ最高限度の稼働所得は、現行の3,000ドルから1981年には5,500ドルに上げられ、1982年にこの制度は廃止される。

(月所得調査)

働らかなかった月の給付につき所得調査をする規則は廃止される。

(インフレ防止)

以下の制限を設ける：

1. 給付額の引上げ仕組みが生計費の上昇よりも上回るような規定を廃止する。
2. 社会保障年金制度の最低給付額と他の私的年金を合せてうける者に対する最低の当初給付額を約121ドルに凍結する。
3. 早期退職者に対しては、給付額の年生計費調整を彼らの減額給付に応じて行なう。

(定年の延長)

65歳以後の就労1年につき3%増の年金とする。

(国庫補助)

信託基金が年支出の25%以下に落込んだ場合に、国庫から借入れできる。この場合、返済のために必要であれば、社会保障税の引上げの規定を適用する。

上院案

(社会保障税)

被用者よりも使用者により負担増となるように改正する。被用者の最高額は、1977年の965ドルから1982年には1,636ドルに、1987年には2,407ドルに上げられる。使用者に対するそれは、1977年の965ドル(被用者と同額)から1979年には3,068ドルに、1985年には5,288ドルに上げられる。自営業者については、1977年の1,304ドルから1982年には2,276ドルに、そして1987年には3,373ドルに上げられる。

(所得制限)

給付額を失うことのない稼働所得の最高年額は、1977年の3,000ドルから1978年には4,500ドルに、1979年には6,000ドルに上げられる。障害給付をうける盲人に対する制限を廃止する。70歳以上の者に対する制限も、1982年に廃止される。

(月所得調査)

現行法を何等改正しない。

(インフレ防衛)

「2重支給(併給)をうける者」に対する給付額の凍結に関して下院案と同様な制限はない。

自己の私的年金を支給される被扶養配偶者に対する社会保障年金給付額は、私的年金の額によって減額される(申請者に対してのみ適用)。

(定年の延長)

65歳以降の就労につき年金額の割増しはない。ただし、就労1年につき1%の年金額の現行引上げ措置は、生存配偶者にも拡大適用される。

(国庫補助)

国庫からの借入については何等の現定もない。

両案の改正要点は以上であり、下院案は昨年10月27日下院を通過しているが、上院案は、1977年11月現在なお審議中である。

U. S. News & World Report, Nov. 21, 1977.

Congressional Quarterly Weekly Report, Nov. 5, 1977.

(藤田貴恵子 国立国会図書館)

アメリカ人の見た ソヴェト医療システム

1. アメリカの有名な週刊誌「ウォール・ストリート・ジャーナル」に、かなり長文のソヴェト医療システムに関するレポートが1977年5月に掲載された。ジャーナリストティックな手法で、病院やポリクリニックを取材し、保健省や病院・ポリクリニック幹部、外人居留者、入院患者等をインタビューした内容を報告している。ソヴェト保健制度のもつ複雑な諸側面を事実こそくして読者に提示しており、興味深い探訪記といえよう。

2. 現代と中世の同居, その歴史的・地理的背景

筆者のノースラブはまず、「ソヴェトの保健制度は奇形である」という。それは一方ではコンピューターや電子顕微鏡に代表される現代的設備を駆使しながら、他方では『中世』的な蛭を使った瀉血がしばしば行われるし、吸い玉放血法もよく行われるということに端的にあらわれているという。

またノースラブはモスクワ在住の外人科学者のことばとして、「モスクワでは、外交旅券を持っていれば、あなたは西側のと比べることのできる施設に收容されるだろう。外交旅券がなければ:50年前に逆もどりする」と語らせている。同時にノースラブは科学者の次のことばを見落してはいない。「しかし、あなたは、ソヴェト国民がどれだけの道のりを歩んで来たかを思い起こさなけ